

## 森村泰昌、100×100の挑戦

春秋山荘でお茶を楽しむ会を催しているうちに、人が集まり活動支援の輪が広がってきた。催しものは、現代美術だったり、髑髏や人形の展覧会だったり、朗読会だったり多岐に渡る。それゆえにコミュニティの流れは複層的に活発になっている。茶畑を作り、竹で茶室を作る夢も不可能ではない。そこに森村泰昌が新たな形式の展覧会をもって登場した。

/// 2017.4.9号



### MoriP100、東京から京都へ

MoriP100は、一万個のマルチプルを100アイテム100エディションで展開する森村泰昌の壮大なプロジェクトだ。2017年1月に始動し、2月、東京・柳橋のパラボリカ・ピスにオープンしたポップアップストア1号店「森村泰昌・屋」をもって走りだした。ショップの顔をした展覧会、ショップ以上で展覧会未満のお店の顔をしたギャラリーだった。

京都では、演劇空間にお店を持ち込んでみることにした。経済活動のもつ演劇的要素に着目し、お店を劇場空間と捉えたのだ。タイトルは「ザムザの黒靴」。フランツ・カフカ『変身』は、主人公グレーゴル・ザムザがある朝めざめて自分が人間でない何物かに変身してしまったことに気づく場面から始まるが、変身する前の彼の職業はセールスマンである。日常生活として経済活動を営む人であるべきザムザが、非日常な異常事態のなかにいるアブノーマルな存在になってしまった。「この変身してしまったザムザ君とは芸術家だと僕は思うのです」と森村は言う。経済活動と芸術表現。綱渡りのように両者をまたいで、マルチプルを販売するという行為を演じてみようじゃないか。セールスマンが商品を入れて持ち歩くような黒靴(Black Case)を携えて。

こうして森村泰昌の摩訶不思議プロジェクト「MoriP100/ザムザの黒靴」が開幕した。

■福田容子



### ●limitとlinkage、手の届く特別

そもそも話からします。「MoriP」、これはモリピーと読むのかモリップと読むのか。内部でもわかれたところですが、モリピーと呼ぶことにしました。MoriP100(モリピーひゃく)というプロジェクトになります。

さて、そもそもMoriP100って何なのか。MoriPの「Mori」はモリムラのモリですね。「P」は、これはいろんな意味を持たせていまして、プロジェクト(project)、プランニング(planning)、プロダクト(products=製品)、ピース(piece=一片、一つ)、いろんな意味をもたせて「P」としました。

今回、私と今野裕一さんが二人で何をやらうとしているかというと、マルチプルをつくらうとしています。私が考えるマルチプルとは、「商品以上、作品未満」というあり方をしているオブジェ

です。作品というのは、たとえば絵画作品のように世の中に一点しかないものを言います。誰か一人が一つを所有してしまえば、他の人はもう一つすることができません。これと対局にあるのが製品、商品です。商品は、ニーズがあれば千個でも一万個でも十万個でもつくるような、量産のきくあり方をしています。マルチプルは二つのもののあり方の間にくるものです。

MoriP100は、「100」とあるように、1個ではなく一万個でもなく、100個限定でつくります。個数を限定するわけです。そうすると、商品のようにな万人や百万人には行き渡らないけれども、少なくとも100人には行き渡る。作品は一人にしか行き渡らないけれど、100という幅を持たせることができます。

別の言い方をすれば、「作品ほど重くない。商品ほど軽くない」とも言えます。商品ほど軽くない

いけれど、(美術館などに)展示されると触れられない近寄れなくなってしまうような重々しい作品でもない。こういうあり方が私には心地良いんですね。そういう気分は、つくる側と所有する側の関係としていいんじゃないかと思うんです。そうした「商品以上、作品未満のあり方をしているもの」というマルチプルのあり方として、100個限定という意味での「100」です。

「100」にはもうひとつ意味があります。現在このような考え方で、あるマルチプルをつかって発表しているわけですが、一回限りでなく100回続けます。こういうことを100アイテムやらうとしてるんですね。マルチプルを100アイテム、それを各100、つまり最終的には一万個つくらうと。それがこの「MoriP100」というプロジェクトです。

「モリリン」を記した今回のキービジュアル

未満、商品以上」というあり方をしています。一方、ポップアートは、たとえばアンディ・ウォーホルがキャンベルスープの缶のような1960年代初頭のスーパーマーケットで誰もが手に入れることのできた日常的商品をテーマに作品をつくったように、商品と作品のアイロニカルな関係を表現として使っていくものなんですね。私達のマルチプルをつくるにあたり、出発点としてポップアートをテーマにするのはびったりだと考えて、アンディ・ウォーホルのポップアートをテーマとして、第一作目のマルチプルをつくりました。

今回私がテーマとしたかったのは、そうした作品のなかのひとつであるアンディ・ウォーホルの「ブリロ・ボックス」です。ウォーホルは、1960年代はじめに、当時のアメリカのさまざまな日用品をテーマにさまざまな作品をつくりました。Brillo(ブリロ)とは soap pads(ソープパズ)、日本語で

今回が第一回目の発表で、次回はまた全然違った形で別のマルチプルを発表していきます。ですので、一年やそこらでは全然できません。2年、3年、数年かかるかもしれない長丁場のプロジェクトです。今回はその第一回目ですが、できれば次へ、また次へと、みなさんと長いおつきあいをしつつ、裾野を広げていければいいなと思っています。

### ●ウォーホルのブリロ、モリムラのモリロ

では、第一目にどういうものをマルチプルとしてつくらうかと考えたときに、テーマをポップアートと設定することにしました。なぜポップアートか。いま話したように、マルチプルは「作品

いうと石鹸つきタワシのことです。金属のタワシに粉石鹸がまぶしてある。水やお湯をつけて磨くとキレイに汚れが落ちると。それがブリロという実在の商品で、その段ボール箱を元にウォーホルは「ブリロ・ボックス」をつくりました。タワシのブリロは今も販売されていますが、パッケージデザインは60年代の方が圧倒的によかった。現行デザインだとウォーホルは使わなかったかもしれません。このタワシは日本でも今も売っていて、私も使ってます。けっこうよく落ちる(笑)。金属



MorilloとBrillo



映画「自画像のシンボシオン」より 撮影：福永一夫

ウォーホルに扮し、Morillo段ボールをインсталレーションする森村泰昌  
映画「自画像のシンボシオン」より 撮影：福永一夫



タワシなので若干キズがつきやすいけれど、フライパンやなべを焦がしてしまったときにはいい。まあ今日はブリロの宣伝ではないですが(笑)。

Brilloは、英語でいうとbright、スペイン語で「輝かしい」という意味です。磨くとピカピカになりますよと。そこからの連想というか類推で、きちんと調べたわけではないのですが、私の仮説として思っていることがあって。アメリカの隣国にメキシコがあります。メキシコはスペイン語圏ですね。アメリカにも多くの人が移り住んでいる。で、庶民がスーパーマーケットで買える安価な石鹸タワシがスペイン語でネーミングされているということは、これをだれが使うかを前提としたネーミングだろうと思うのです。そして、60年代当時、あるいはそのもっと以前から、今のトランプ政権にまでつながる、移民の国アメリカの社会構造を映したものであるんじゃないかと。

そういうスーパーマーケットで誰もが買える商品を元に、ウォーホルは作品を作った。ですが、じゃあアンディ・ウォーホルはスーパーマーケットでブリロの箱を買ってきて「これが作品です」と言ったかという、そうではない。ここが彼のうまいところですね。彼の作品は、木でつくった箱の上にシルクスクリーン印刷でブリロのデザインをプリントしたものです。木のキューブの立体、いわば彫刻であり、まさに作品です。しかしデザインはブリロという商品である。そういう形をとりながら、当時アメリカでどこでも買えるさほど高価でない商品のデザインをプリントすることで、キューブの立体物という彫刻作品的なものと同格的なものの中をいくあり方をアイロニカルに提示している。これがポップアートなんですね。

## ●マルチプルと本、メディアの将来

では私の今回のマルチプルは何か。じつは私はすでに Morillo (モリロ)段ボールという作品を作って発表していました。Brillo (ブリロ)の「B」を遊んで「M」に変えて「Morillo (モリロ)」としたんですね。それをいろんなところに並べたり映画のシーンに使ったりしていました。ですので、今野さんと「マルチプルをつくろう」という話になり、ポップアートを最初のテーマにしようという話になったとき、私は単純に「じゃあ、これあるやん」と考えました。この大きなモリロ段ボールをそのまま最初のマルチプルとしようと言ったんです。そうすると今野さんは「いやあ、森村さん、これはちょっと大きいんじゃないか」と言うんです。「もうちょっと手になじむ感じがいいよね」と。机に置いたり、棚にちょっと飾ったり、掌に馴染んで触ったりできる方がいいと。はじめはその意図が少し掴みきれなかったんですが、いろいろ話して

いくなかで、なぜ今野さんが小さくしたいかがわかり、私も小型化に賛成しました。

どういことかという、僕は日頃作品をつくっていますが、今野さんは本をつくる編集者なんです。僕も大好きな雑誌「夜想」をはじめいろんな本をつくってきた。その今野さんが、編集者として、いま、この電子メディアの時代に、本というものに強い危機感をもっていると言う。本のおもしろさが認知されなくなってきている時代のなかで、本というものの魅力を何らかの形で伝えたい。そして、かつて本がもっていたあり方を、本がもっていた大事なものを、本ではない何か別のメディアに置き換えられないかと。そういうところから、マルチプルの世界につながっていく。

その立場から見てみて、僕は「なるほど」と思ったんです。本というものはどういうものか。まず、本はこんなに大きくない。手で持てる。本棚なんかには置くことができる。そして手の中で触れることができる。ハードカバーとソフトカバーでは



Morillo段ボールのインсталレーション 左：パラポリカ・ビス 右：春秋山荘

素材も手触りもイメージも全然ちがう。内容、つまり何がそこで語られるかとともに、表紙や本体の紙質も含めて、どんなオブジェ感のあるものか本にとってとても大事なんです。触って感じるものでもある。彼はそこを考えているんだろうなと、私は私なりに解釈したんですね。そうすると、こういうものをつくる発想がよくわかる。

言ってみれば、これは本なんです。あるいは本に代わるメディアなんです。100部限定の豪華な本。本は開いて読むものです。ならばこの箱も

開けなければなりません。外の箱は本のカバーであり表紙です。開けて中に入っているものはページ。つぶられていないページであって中身です。どこから見てもいい本。そう私は解釈したんですね。

だとしたら、たしかに段ボールでは大きい(笑)。今野さんがマルチプルにこだわる意味も僕なりにわかる。で、「それおもしろいね」ということで、手に馴染む大きさの MorilloBox をつくりました。本のように棚にあって、ときどき触ったり開けた



り覗いたり。それなら、表現したもののあり方として面白いなと思ったんです。

### ●ウソかマコトか、芸術とは何か

今野さんは編集者としてコンセプトの容れ物をどうするかを考えています。このマルチプルを

メディアとしてどういうものにしていくかという編集を考えるわけです。僕はいわば著者ですので、著者として、内容、つまりコンセプトを考えなければなりません。中にはいくつかのアイテムが入っていますが、今回、ここで私はちょっとしたコンセプト的な遊びを入れ込みました。

いま話したように、元になっているのはアンディ・ウォーホルの「ブリロ・ボックス」という作品です。しかしそのさらに元に、1960年代にスーパーマーケットで売られていたりする製品のブリロ（タワシ）があります。製品ブリロは本物です。その本物のブリロからすれば、ウォーホルのブリロは偽物です。アンディ・ウォーホルが偽物をつくった。そのウォーホルの偽物をテーマに、私はまず、そのさらに偽物のモリロの箱（大きな段ボール）をつくった。で、今度はそのモリロの箱の小さい偽物をつくって、その中にさらに小さい偽物が入っています。

開けていくととどどん偽物が出てくるというマ



森村泰昌 [もりむら・やすまさ] MORIMURA Yasumasa

1951年大阪府大阪市生まれ、在住。京都市立芸術大学美術学部卒業、専攻科修了。1985年、ゴッホの自画像に扮するセルフポートレート写真を制作。以降、今日に至るまで、一貫して「自画像的作品」をテーマに作品を作り続ける。1989年、ヴェネツィア・ビエンナーレ/アパルト88に選出され、以降国内外で展覧会を開催。2014年横浜トリエンナーレではラストをかざる炎のパフォーマンスが深い感動を与えた。日本を巡回中の「クラナハ展—500年後の誘惑」にも作品が展示されている。2016年に開催された話題となった国立国際美術館（大阪）での個展「森村泰昌：自画像の美術史—「私」と「わたし」が出会うとき」が、現在モスクワの国立プーシキン美術館に巡回、4月8日まで開催。

「森村泰昌」芸術研究所  
<http://www.morimura-ya.com/>

トリョーシカのような構造ですが、最後の小さな箱に、私はあるものをぜひ入れて欲しいとリクエストして、無理やり入れてもらいました。中に何が入ってるかと思いませんか？ じつはここに洗剤つき金属タワシ「ブリロ」の現物が入っています。最後に開けたらそこには「本物」が出てくる。そしてこの「本物」は、日常生活に役には立つけれども、美的にはつまらない。偽物の連鎖反応によって形作られるプロセスこそが芸術の本当の世界である。その中から本物が出てくるが、出てきた「本当の世界」は、「なんだ、こんなものだったんだ」となる。うそかまことか、芸術とは何か。そういうコンセプト的な物語をマルチプルの中に織り込んでみたわけです。

トーク ■ 森村泰昌 テキスト ■ 福田容子



#003



裏面にはサインとロゴが箔押しされています

オンラインショップにて販売中!  
[http://www.parabolica-bis.com/SHOP/W\\_270.html](http://www.parabolica-bis.com/SHOP/W_270.html)



#005



MoriP100

# MoriP100/001~005 Morimura Yasumasa

【セット内容】

#001  
 Morillo box\_L モリロボックス[大]  
 W110mm×D90mm×H110mm

#002  
 Morillo box\_S  
 モリロボックス[小]  
 W60mm×D50mm×H65mm

#003  
 Morilyn coasters (a set of 12)  
 モリリンコースター 12点セット  
 W90cm×H90cm

#004  
 Morilyn masking tape  
 モリリンマスキングテープ  
 W15mm×5m

#005  
 Morilyn button badges & a mirror  
 モリリン缶バッジ&ミラーセット  
 button badges: φ32mm, φ25mm  
 a mirror: φ57mm



#001



#004



#002



Cedit Sheet

# 「MoriP100/ ザムザの黒靴」 “売人” ドキュメント

MoriP100プロジェクトは、企画書も行程表もないアート行為。予定調和はないまま走る。自分にとって理想の形態。だからずっとずっとやりたかったこと。でも怖くてそんなことは誰もできない。ましてや世界でも活躍中の現代美術の作家と、無手勝流で一万個をめざすなんて。でも不思議なことに動き出している。まあまあ順調に。

ザムザの黒靴は、カフカ『変身』のグレーゴル・ザムザ、つまり虫になった青年の職業がセールスマンだったところから来ている。もう一つは、アートが作品と観客／購買する人とどう新しい関係を構築できるかという試みから来ている。ポップアップストア、トランクショップ。それがキーワード。

そして春秋山荘に集っていた人々から指名されたり誘われたりした人を中心に「売人」が生れた。その代表的存在が延原、通称のぶりんだ。

(ま、それしかできなかったもので)と、それは面白いですね、と  
 言っていただけ  
 ねが伝染した。  
 もお、ソクゾクも  
 のである。成り行  
 きのまま(こま  
 で至ったが、それ  
 も何とも面白い。  
 ■延原圭亮



私は今、ロームシアター京都のPepperくんの横に立っている。MoriP100の売人として。何とも不思議で面白いことになっている。  
 思い起こせば昨年のまだ暑い頃、「春秋山荘でおいしいお菓子をたべられますよ」と福田女史に誘われて山荘を訪れたのがその端緒。茶坊主として茶会のお手伝い(コレもお菓子で誘われたか)などしていたが、まだまだ心底冷えるある日、編集の仕事をしているという今野氏に唐突に段ボールの小箱を出されて話を聞かされたのがMoriP100との最初の出合い。話のオチが「セールスのパフォーマンスをしてほしい」とのこと。正直面喰らったというはあるけれど、こんなことがあさっての方から自分の手元に転がってきたというのも何とも不思議な縁というもの、と面白く思ったのも確かなところ。「何やらの箱を開けることになるのかも」と思いつつ引き受けることにした。  
 3月18日、展覧会初日、作家森村氏直々の指導を受け、いきなりロームシアター京都に立つことと相成った。子供に大人気のPepperくんにも多少の嫉妬を感じながら立っていると、一気にしてそういMorilloの段ボール箱を覗いている「婦人を見つけ、恐る恐る声をかける。『気になります?』。聞けば森村作品のファンらしい(チャリンス!)。先に森村氏から聞いた話の中でピッとキタ「ウォーホルの『Brilloの木箱』、そしてそれをもじった『Morilloの小箱』という虚構の世界の中にはBrilloの木箱の元になった洗剤Brilloの本物が入っている。しかも、虚構に厳重に包まれた本物は思いのほか大したことない」ということを中心に丁寧に説明した



**MoriP100**  
Morimura Yasumasa Store



販売実演を演じてくれた春秋山荘のオーナーの大野木啓人さんが、13時頃、リハーサルが始まる前に現れ、山荘に足を踏み入れて、「おっ」と輝いた顔をした。「良いコミュニティが立ち上がっているねえ」と。まだ人も集ってきていないのに、さすが春秋山荘でのアート活動を最初から見てくれている、そしてアーティストと人の関係を死ぬほど体験している大野木さんの炯眼。何かが動き出しているのに反応している。コミュニティというのは、こんな風にしようというところから出きあがるものではない。人が何かを(ここではアート)を介して絡まり始めて起きるのがコミュニティだ。集った人が積極的に絡みの触手を上げるとさらにコミュニティは充実して力をもつだろう。 ■今野裕一

## /// CHAKAI KI

2017年3月26日[日] 於:春秋山荘

床◆「ザムザの黒靴」/「MoriP100/001~005」森村泰昌 /「Morillo」森村泰昌

皿◆ 海の星 絵及銘森村泰昌 特殊金継小林剛人

茶碗◆ 魔久兵衛守 銘森村泰昌 森村泰昌墨書由来書付 大村邦男所蔵

マクドナルド  
 ココロしずく 伊野敬裕作 銘森村泰昌  
 森村泰昌墨書由来書付

菓子◆ 喜仙堂製 蕨餅、  
 タンドレス ケック・オ・カフェ

御茶◆ 柳桜園詰 小桜



## /// SHOP LIST

パラボリカ・ビスは元々は雑誌「夜想」の立体的展示場としてはじまったオルタナティブ・ギャラリー。  
展示やパフォーマンスは融合的に、そして未来の可能性を目指して実験的に行われている。  
春秋山荘が加わってさらに実験は、地域と自然に拡がっていく。MoriPも  
もしかしたら山荘のお茶飲みからはじまったのかもしれない。  
MoriPも派生プログラムがたくさん組まれてきた。



### POP-UP STORE

#### parabolica-bis

parabolica-bis パラボリカ・ビス [東京・柳橋]  
2017年2月10日～3月13日  
4つのギャラリースペースをもつオルタナティブ・ギャラリー



#### shunjû-sansô

春秋山荘 [京都・山科]  
2017年3月18日～4月9日  
竹林に囲まれた築147年の古民家がギャラリーに



### TRUNK SHOP

ロームシアター京都/  
京都岡崎 蔦屋書店  
2017年3月18日～4月9日  
京都 会館。2016年1月にロームシアター京都としてリニューアル



#### 細見美術館 アートキューブショップ

2017年3月18日～4月9日  
京都 岡崎にある私立美術館。3階には数寄屋の茶室もある



#### knot (家具店)

2017年3月18日～4月9日  
京北に工房をもつオーダー家具店の西陣ショールーム



#### 吉田屋料理店

2017年3月18日～4月9日  
御所南の路地奥、国内外のアーティストが集まる隠れ人気店



2016年  
12月22日【木】  
森村・今野ミーティング@カフェ・パッハ

2017年  
2月10日【金】～26日【日】  
第9回 恵比寿映像祭「マルチプルな未来」  
@東京都写真美術館ほか

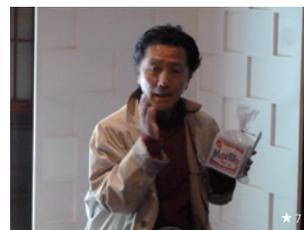
2月10日【金】～3月13日【月】  
MoriP100 森村泰昌・屋 [東京柳橋店]  
@パラポリカ・ビス  
ポップアップストア1号店としてオープン\*0  
初日オープニングイベントは森村泰昌・今野裕一のトーク、日比谷カタンズスペシャルライブ\*1 21世紀東京にFACTORY出現!?

3月3日【金】  
松蔭浩之&ベッチンアンダーグラウンド\*2  
LIVE @パラポリカ・ビス  
森村の近作「青年カフカ」「少年カフカ」  
連作と共に、カフカを体感するショータイム。ライブに加え、森村泰昌が語り、井上弘久\*3 コイケジュンコがパフォーマンス。

3月12日【日】  
SKANK x 石垣文子 in 森村泰昌・屋 [東京柳橋店] MoriP100@パラポリカ・ビス  
Nibrollの音楽家であるSKANK/スキャンクと同カンパニーのダンサー石垣文子が、美術家森村泰昌氏の展示空間でパフォーマンス\*4。



## T O K Y O



## K Y O T O

3月18日【土】～4月9日【日】  
森村泰昌の摩訶不思議プロジェクト  
「MoriP100/ザムザの黒靴」\*5 @京都・山科 春秋山荘  
初日オープニングイベントは井上弘久朗読パフォーマンス「ある日のザムザ君」\*6、森村泰昌ソロトーク\*7 「MoriP100とは何か」立ち見も多数の満員御礼で好スタート。

3月18日【土】～  
京都市内トランクショップ次々と開店。  
ロームシアター京都ではMorillo段ボールのインスタレーション。京都 岡崎篤屋書店では本とアイテムの書棚編集。家具店knotではトランク型の棚に作品/商品が並ぶ。

3月18日【土】～  
“売人”活動開始\*8  
初日キックオフMTGを経てその日から始動。トレードマークの黒い紙袋、名刺と変な名前を持ち、家庭で職場でトランクショップでウェブ上で、“セールス”を展開する。

3月26日【日】  
「MoriP100/ザムザの黒靴」Tea Party\*9  
@京都・山科 春秋山荘  
森村ソロトーク、茶菓、黒衣の“売人”と大野木啓人氏の絶妙パフォーマンス。ゲスト平芳幸浩氏の現代美術ミニトークから森村・今野の白状が続く高密度対話へ。



to be continued...

## /// EDITOR'S NOTE

「MoriP100/ザムザの黒靴」の23日間 “売人”<sup>うりんど</sup>たちの夢中、熱中、道中、火中

英雄伝説の主人公は使命を得て彼方へ旅立ち、イニシエーションを経て不思議な冒険から帰還する。森村と今野の召喚に応じた彼・彼女らは、掌中のマルチプルをインターフェイスとして日常と非常を往き来する“売人”<sup>うりんど</sup>になった。ザムザの旅立ちである。

展覧会初日、彼らはイベントを見に来た参加者をお客役として初めてのセールスを体験した。うち二人、のぶはらと公田八里嬢は、森村の黒靴をもってサテライト会場のひとつロームシアター京都に出むき、インスタレーション展示の横で売人を演じました。記録係として同行した八里嬢から送られてくる写真と動画のなかののぶはらはいかにもセールスマン然として、虚構と現実が彼のところでにじんできた。これはいける。初舞台の成功はプロジェクトに風を送った。

その夜のうちにメーリングリストが立ち上がり、翌朝には森村から撒がとぶ。あちこちから声が入り始めた。小道具として名刺をつくらう。売人と

しての役名もいんじゃないか。マニュアルブックを携行するのもそれっぽい。次々と出るアイデアをミルキィ・イソベを中心とするデザインチームがみるみる形にしていく。一週間を待たずに売人名刺もマニュアルブックもとくに完成していたし、初舞台翌日から売人達による「セールス活動」がすでに高速に動きはじめていた。

3月26日の「ザムザの黒靴 TeaParty」では、観客の前で「上演」もした。春秋山荘オーナーである大野木啓人をお客役として、売人のふはらがマルチプルをセールスする。役者達の絶妙のアドリブに会場は沸いた。いや、見守る観客達こそが名脇役だったのかもしれない。

京都展覧会期最終日の4月9日、春秋山荘に帰還する彼らが何を携えているのか、いないのか。MoriP100はここからどこに向かうのか。暴走上等。定めたゴールに向かうのではなく、辿りついたところをゴールと見定めたこのプロジェクトに安全運転は似合わない。 ■福田容子

## /// CAST

### ◆森村泰昌の摩訶不思議プロジェクト「MoriP100/ザムザの黒靴」配役

<p>【売人】 のぶはら (大阪) 藤木不二人 (滋賀) 岸本貴代子 (兵庫) 野晒しハノ (大阪) 公田八里嬢 (大阪) ザムザNo.8 (京都) タラタラ・ウリンド (京都) 吉井優子 (埼玉) 齋藤成拳 (東京)</p>	<p>【東京運営】 ミルキィ・イソベ (東京) 安倍晴美 (東京) 小野美樹 (東京) 高橋美幸 (東京)</p>	<p>【茶菓】 柳櫻園茶舗 (京都) 御菓子司 聚光 (京都) パティスリー タンドレス (京都) 菓子店 千茜 (京都)</p>	<p>細見美術館 アートキューブショップ (京都) knot 家具店 (京都) 吉田屋料理店 (京都)</p>
<p>【京都運営】 福田容子 (京都) 延原圭亮 (大阪) 羽野真由美 (大阪) 菊池しのぶ (京都) 八木若菜 (京都)</p>	<p>【設置】 望月裕美子 (東京) 高橋美幸 (東京) 竹中正子 (大阪)</p>	<p>【しつらい】 栗山文孝 (京都) 中島匠 (京都)</p>	<p>【デザイン・アートディレクション】 ミルキィ・イソベ (東京)</p>
<p>【マネージメント】 大館奈津子 (東京)</p>	<p>【記録】 大村邦男 (大阪)</p>	<p>【プロデューサー】 今野裕一 (東京)</p>	<p>【アーティスト・ディレクター】 森村泰昌 (大阪)</p>
<p>【ポップアップストア】 パラポリカ・ビス (東京) 春秋山荘 (京都)</p>	<p>【トランクショップ】 ロームシアター京都 (京都) 京都岡崎 蔦屋書店 (京都)</p>	<p>【プロデューサー】 今野裕一 (東京)</p>	<p>【アーティスト・ディレクター】 森村泰昌 (大阪)</p>

夜想  
茶会記  
#06

2017年  
4月9日発行

発行人 ◆夜想+今野裕一  
編集 ◆福田容子

デザイン ◆ミルキィ・イソベ 安倍晴美  
夜想茶会記運営 ◆福田容子 延原圭亮 菊池しのぶ 羽野真由美

## /// KAFKA by YASUMASA MORIMURA

### ◆森村泰昌によるカフカ作品のエスキース



少年カフカのためのエスキース / 森村泰昌

青年カフカのためのエスキース / 森村泰昌

オンラインショップにて取扱っています  
<http://www.parabolica-bis.com/>

## /// INFORMATION

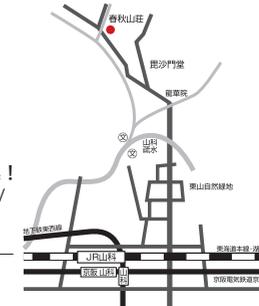
### ◆展覧会

#### 中川多理人形展「幻鳥譚 WIND- fragments 風のフラグメント」

4月14日[金]～5月28日[日] ※会期中の金・土・日・祝のみopen



★ 京都スタッフ、サポーター募集!  
[http://www.yaso-peyotl.com/archives/2008/06/post\\_363.html](http://www.yaso-peyotl.com/archives/2008/06/post_363.html)



京都・山科 春秋山荘 京都市山科区安朱稲荷山町6 TEL:075-501-1989  
各線山科駅徒歩約20分、駐車場有

Parabolica-bis HP | <http://www.yaso-peyotl.com/> Twitter | [https://twitter.com/yaso\\_peyotl](https://twitter.com/yaso_peyotl)  
FB | <https://www.facebook.com/YeXiangYasoParabolicaBis>  
Shunjūsansō FB | <https://www.facebook.com/syunju.sanso/> Twitter | [https://twitter.com/syunju\\_sanso\\_ky](https://twitter.com/syunju_sanso_ky)